

八月二三日（水）

「駅まで見送ってもらっちゃって、すみません」

ガストでの打ち合わせを終え、今からまだ梅田で用事があるという郁美さんと、駅の改札前までやって来た。私は、自分の歩きが遅くなかったか尋ねると、彼女はすぐさま、「いえいえ」と否定してくれた。

「それに、まだまだ余裕がありますから」

彼女によると、午後七時に阪急梅田駅に着けば十分なのだとか。今から乗ると、確かに三十分ちよつと早そうだ。

「慌ててガストを出なくても良かったんですね」

「でも、香帆さんもお忙しいでしょうから、あんまり長居しても」

彼女は私を気遣いながら、改札の奥にある案内表示をチラッと見た。ちようどいいタイミングで、次の特急がやってくるらしい。

「じゃあ、日曜日はよろしくお願いしますね」

彼女は颯爽とパスケースを取り出し、流れるように改札を通り抜けて行った。ホームへ上がる前にこちらへ改めて頭を下げると、エスカレーターの方へ姿を消した。

午後から打ち合わせを二本やり終えて、あつという間に午後六時。まだ明るい時間帯だけでも、駅を抜けてイオンを見て帰るのはちよつとシンドい気もする。せめて帰り道の無理のないところで寄り道するぐらいだろうか。

土曜日に買い出しに行った分で基本的に賄えるけど、何か面白いものがあれば買って帰りたい。とりあえず、下へ降りて、阪急オアシスを回って帰ろう。

駅前の塾に向かう小学生や、今から家に帰る子供たち、部活帰りや学校帰りっぽい高校生の姿もチラホラ。時折自転車に道を譲りながら、中央公園の方へ曲がる。道路向かいの角のラーメン屋さんは、今日も沢山並んでいる。

哲朗くんぐらいの年頃なら、友達と連れ立って並んだりするんだろうか。でも、彼にああやって行列に並んでラーメンを食べるイメージがあまりない。一人暮らしだというし、年相応にインスタント麺なんかも食べそうだけど、割と健康そうないメージもある。

彼よりは、武藤さんの方が似合うかなあ。濃厚なラーメンとか、街中の中華屋さんが好きそうなイメージ。濃い味付けを好みそうな気がするけど、日曜日ではきるだけ身体に気を遣った味付けにしよう。

駐車場から出てくる車を一台やり過ぎし、阪急オアシスの中へ入る。そんなに買わないと思うけど、カートにカゴを載せ、青果コーナーから順番に眺めていく。この辺りに目ぼしいもの、目新しいものは特にないかなあ。

お肉もお魚も間に合っている。お酒も必要なものはあるし、乳製品やパンも急いで買わなきゃいけないものは特にない。あとは調味料のコーナーぐらいか。後ろに気をつけながらカートをキュッと左へ向ける。向こうに見える「だし」のところから見えて行こう。

お味噌も出汁も、ビビッとくるものは特にない。塩、砂糖も特別に欲しいものはない。お酢やみりんも間に合っている。あとはソース、ケチャップぐらいか。カートを押しながら、そっちのコーナーへ入った。

「あれ、小野寺さん」

数時間前まで打ち合わせをしていた哲朗くんが、真剣な面持ちでソースの棚の前で立っていた。私は「こんばんは」と挨拶すると、彼は私の荷物を見るなり、

「あの後、ずーっと打ち合わせされてたんですね」と言った。

「いい話できました？」

私が頷いて返すと、彼は「それは良かった」と微笑んだ。

初出 令和三年一〇月一〇日 MAGNET MACROLINKにて公開